



読売歌壇



小池 光選

背と腹にカイロを貼って七人の敵のひとりと対峙してをり 対馬市 神宮 齊之

【評】男はひとたび家を出れば七人の敵がある。今日その一人と会う。その準備にカイロ貼って出て行くところがおもしろい。さあ、負けなぞ。背中と腹部がぽかぽか。

春雪の庭に少女が降り立ちてかまぐらつくる子犬のかまぐら 角田市 豊岡 浩一

【評】かわいいう。少女はお孫さんか。春の雪をあつめてかまぐらを作る。大きなものではない。子犬が入るくらい小さいなかまぐら。ほのぼのとしたようさがある。

取り出せば父の「ふるさと」流れ出す引き出しの奥に眠るハモニカ 校方市 鍵山奈美江

【評】父はよくハモニカを吹いていた。「ふるさと」などよく吹いた。すでに父亡く、ハモニカ残る。あれから何年たっただろう。

この坂は自転車漕いで登った バスの中から遠い日を見る 高槻市 佐々木文子

どんぐりでメルヘンチックなプローチを作りてくれし友はいまなき 岡山市 前原 和子

耳鳴りの凄まじきと轟音の瀑布の内に住まふ如くに 神奈川 露木 美子

暖かい日差しだねえと祖母の声 鎮きながら園児等が行く 横浜市 杉山 太郎

仮の世に仮の住まいのあるとく冬 蝸牛の殻のからっぽ 宮崎市 長友 聖次

孤独からひとりひとりを救い出す詩を書いていた俊太郎さん 筑紫野市 二宮 正博

春風が吹いてくる頃汽車に乗り蜂須賀様また見に行くよ 鳴門市 楠井 花乃

栗木 京子選

「今日はこれね」選んだ小さなプローチをデイケアに行く夫の胸に 多摩市 高野 正子

【評】男性がつけるプローチも素敵である。しかも、出かけるたびに妻とともに選ぶプローチ。デイケアの間も見守ってくれる気がするにちがいない。心が温まる歌である。

七画で一つの線もふれぬ老いの孤独に「沁」みるという字 駒ヶ根市 春日 賢治

【評】漢字の「沁」は七画。どの線や点も互いにふれ合わない。間接的に心を濡らす感情が「沁みる」と言えようか。孤独だけでなく、言葉や親切も沁み透るのだ、と思う。

空見上げバナナがあると指さす兄は昔の思い出となり 東京都 金谷 裕子

【評】三日月をバナナと表現したのかもしれない。あるいは兄には本心に空にバナナが見えたのか。思い出の清らかさが心に残る。

除雪車をめざまし代わりに床をうる朝は心も雪に埋もれる 上越市 内山 正雄

ふたご座の流星光るこの一瞬一つの空へミサイルのとどろ 今治市 青野 千春

世界地図変えようとする国がある幕が上がったトランプ二幕 大船渡市 富谷 英雄

秋くれば黄金色になる稲田失せ法人経営のキャベツ畑に 流山市 西郡くに子

手荷物と長距離バスの床に置き古里目指す家業を継ぎに 金沢市 山本 健夫

常温でとけるバターを賣めますな一身上の休職理由 行田市 小枝 鷹緒

形なきもので風は吹き飛ばす眩しいだけの真冬の日差し 三田市 藤原栄美子

俵 万智選

姉はあのポストに行ってくれたのだ封を開けると雪国の風 鳥取市 中之島 潤

【評】書き終えて封をしてポストに入れるところまでを含めて手紙なのだ。「あの」言うからには思い浮かぶポストがあるのだろう。雪のなか、自分のために歩いてくれたことへ思いを馳せる。手紙の醍醐味の詰まった一首。マフラーは風になびいて傍らのあなたのことにも温めたる

【評】マフラーを主語にしつつ、そう感じるのには、実は自分自身があなたを温めたいと思っているから。遠回しな表現がぐっとくる。

デート中妹からの着信にこたえるきみの姉っぽい声 上尾市 関根 裕治

【評】電話あるあるだ。意外と大人びた面もあるという驚きだろうか。自分の知らない相手の一面を、楽しむ気持ちが伝わってくる。

標本の蝶は百年羽ばたかず百年動かぬ影に寄り添う 大和郡山市 本田 岳

慎重に恋人であり続けてねクッキー缶を絶やさぬように 東京都 遠野 鈴

黄の鳥の眠る二月の庭先にさえずるように咲くクロッカス 平塚市 小林真希子

スマホ無き昭和がいいとつぶやけばちょっと鎮く奈良の大仏 所沢市 岡部 泉

もう今はない公園を掲げてる墓標のようなバス停がある 越谷市 あきやま

抑揚のない日の夕暮れケチャップのとび出る音が部屋にひびいた 大阪府 川田ゆかり

竹馬の友ひとりとなりてふさふさにわが入選のうたを待ちをり 成田市 神郡 一成

黒瀬 珂瀾選

生まれ来て五年と少しの幼児があらはれ瘦身願望を持つ 池田市 寺阪 誠記

【評】自分にとって自然な身体……。それで十分なのに、「痩せ信仰」が広まる現代。その価値観を敏感に嗅ぎ取ってしまふ幼児。そんな社会でいいのか、一抹の不安が過ります。受話器口に能登のなまりの妹は転居の先を淡々と

【評】昨年の能登震災の影響で転居を決めたのでしよう。親しんだ土地を離れる決意を淡々と語る様子に深い悲しみを感しました。

もう雪に泣く父母なきに妙高の雪のニュースに不安濃くなる 狭山市 古谷真利子

【評】豪雪地帯に暮らしていた両親はもういない。それでも大雪が降るたびに雪害への思いが深くなる。雪国出身者の心情がリアルに描かれました。「妙高の雪」が効いています。

集落の区長引き継ぐ荷の中に「軍事郵便」墨書きの箱 大和郡山市 四方 護

老いねばならず消えねばならず見つけたり寺院の庭に石のベンチを 青森市 前田 亨静

夢でしか逢へぬ友とのおしやべりは尽きることなし起きると急がす あきる野市 大西 国子

霜繁き狭庭に咲いた一輪の福寿草見る朝の幸せ 香取市 山之内俊一

きららなす神通川に雪解氷は土のひとくれ呑みこまむとす 羽咋市 中島 君夫

そつえいはお前も浮世嫌いか手酌の愚痴を聞いてよ海風 東京都 佐藤 勝美

朝夕に雲の動きを眺めつつ病身はベッドで待ちわびる春 別府市 中島 俊子